

総論

満点	60点	目標得点	39点	試験時間	60分	偏差値	70
大問数	4	小問数	48				
【解答形式】		選択式	34/48問	記述式	13/48問	論述式	1/48問
【問題難易度】		C	15/48問	B	21/48問	A	12/48問
※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：前年度に復活した100字程度の論述問題が今年度も踏襲。
- 2：商学部らしく近現代史・経済史が出題の中心である点も例年と同じ。
- 3：他学部と比較して細かい知識を問う難問の割合が高い。平易な問題の取りこぼしは命取り。

こんな力が求められる！

〔前年度合格最低点（3科目）〕129.35 ※偏差値法による修正後の得点（得点率64.7%）

〔前年度受験者平均点〕33.18 ※素点（得点率55.3%）

上記の通り、世界史に関して本学部の問題難易度は他の学部と比較して難問の割合が多い（早稲田大学は例年、文・文化構想・教育といった人文科学系よりも商・政経・社会科学といった社会科学系の学部の方が問題の難易度が高い傾向がある）。今年度の問題を一覧したところ、前年度の難易度（受験者平均点33.18点）と大きな差がないと予想されることから今年度の世界史も、合格には65%以上の正答率が必要になると考えられる。早稲田大学の場合、偏差値法を用い、受験者平均点=50%の得点（世界史の場合だと30点）に換算されるため、受験者平均点と同じ55%の得点では合格ラインに達しないのである。よって、平均点+10%程度の得点を稼ぐ必要がある。仮に、正答すべき問題（難易度A）と合否を分ける問題（難易度B）を全問正解した場合、正解数33問=正答率68%となり、合否ラインギリギリの位置にすることが予想される。従って、自信を持って勝負するためには難問（難易度C）とされる箇所からの正解もある程度必要となってくる。前年度もそうであったが本学部の問題の難易度を上げているのは、19世紀以降の近現代史（特にアメリカ合衆国史）と税制や貨幣をテーマとした経済史である。従って、これらの分野に関しては、お茶ゼミのテキストや用語集を細部に至るまで確認するだけでなく、学校でも副教材として使用しているであろう資料集にも目を通しておくべきである。さらにこれらの範囲の理解の助けとなるのが政治・経済で学習する知識である。「金本位制」、「ブレトン＝ウッズ体制」といった世界史、政治・経済両方の科目で登場する用語はその内容や成立の背景などをきちんと把握しておくこと。

【I】

予想点	14/60 点	時間配分の目安	12/60 分
出題分野・テーマ	古代ローマおよびその後継国家		
出題形式	正誤、選択式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：B 問B：A 問C：A 問D：B 問E：B 問F：B 問G：A 問H：B 問I：A 問J：A 問K：B 問L：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・3月期①3, 4回 ・5月期1, 2回 ・夏期講習「西洋史5つのテーマ」 ・10月期1回		

●本大問の特徴・概要

近現代史でも経済史でもなく商学部らしい問題というよりはどの学部でも出題されるであろうクセのない一般的な問題である。それ故、大問4つのうち最も与しやすい問題であり、ここでの取りこぼしは即、致命傷となる。満点も十分に狙える箇所であり、恐らくここで全12問中、3問以上間違えるようでは合格は不可能であろう。

●注目すべき小問

問A（B：合否を分ける問題）

特定の時期（この問題では前1世紀）に起こった出来事を選択肢の中から選ぶ、センター試験でよく見かける問題。解答への道筋としては、「キケロはカエサルと政治的に対立していた」→「キケロとカエサルは同時代の人物」→「カエサルは前1世紀の人物である」→「よってキケロも前1世紀の人物である」となる。まさか、この問題を見てキケロの生没年を覚えていないと解けないのでは？ と思っている者はいないと信じたい。そのような者がいたら即、学習法を改めていただきたいものである。

問H、K（B：合否を分ける問題）

各選択肢の出来事を年代の古い順に並び変える問題。問Hに関しては、五賢帝時代が終了した後の3世紀の出来事は手薄になりがちなのでこの機会に再確認しておくこと。また問Kに関してもユスティニアヌス帝の死後から十字軍が開始されるまでのビザンツ帝国の流れが手薄になりやすいので（問Hでは2番目、問Kでは3番目となる選択肢を答えさせることから、出題者はこのあたりの学習の盲点になりやすいところを狙っているように見える）、既にこの範囲を学習している者は要再確認である。ちなみに高2秋スタート講座から受講しているお茶ゼミ生は両方とも学習済みである。

【Ⅱ】

予想配点	12/60 点	時間配分の目安	12/60 分
出題分野・テーマ	ヨーロッパ諸国の「多様性における統一」		
出題形式	正誤、選択式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：C 問B：A 問C：B 問D：B 問E：A 問F：C 問G：A 問H：B 問I：B 問J：B		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・6月期1, 2回 ・7月期2, 3, 4回 ・夏期講習「近代史」「現代史」		

●本大問の特徴・概要

ヨーロッパの統合をテーマとした問題。本文はヨーロッパ連合（EU）成立までに至る歴史的な背景について展開されているが、問題を解く上で必要となる力は単純に各下線部に関する正誤判定の知識である。若干、難問も見られるが基本的な知識で対応できるものも多い。この後の大問Ⅲ・Ⅳの難易度が高いため、ここまでで確実に得点しておきたい。

●注目すべき小問

問D、I（B：合否を分ける問題）

大問Iの問H、Kと同じく、各選択肢の出来事を時代順に並べ替えさせる問題。問Dは選択肢4が最初で選択肢2が最後であることはすぐ分かると思うが、やはり出題者はそのような単純な問題を用意してくれるわけではなく、判定が難しい2番目を問うている。アメリカ独立戦争に義勇軍として活躍したコシュエッチが帰国後、ポーランド分割に抵抗することから選択肢1→3なのではと考えがちだが、選択肢1は独立戦争の終結時（パリ条約 1783年）で選択肢3はポーランド分割の開始時（第1回分割 1772年）であるため正しくは選択肢3→1となり、少々難しい（出題者が意図的に仕掛けたトラップか？）。一方の問Iに関しては「サルデーニャがイタリア統一の布石としてフランスとの協力を仰ぐべくクリミア戦争に参戦」→「背後（フランス）の安全が確保されたところでサルデーニャがオーストリアとイタリア統一戦争を戦う」→「イタリア統一戦争で回収できなかったヴェネツィアはプロイセン＝オーストリア戦争でオーストリアが敗れたことにより、イタリア領として回収」の流れを押さえれば論理的に解答を導き出すことは可能だが、選択肢の戦争は全て基本的なもので戦争開始時の年代は覚えておくべきであろう。

問F（C：難問）

ジョゼフ王がナポレオンの兄であることを知っていれば、すぐに選択肢2が誤りであることに気づくが、ジョゼフ王自体、ほとんどの教科書に記載されていない人物であるためやや難しいと思われる。

問H（B：合否を分ける問題）

1878年のベルリン条約とこの直前のサン＝ステファノ条約はその内容を整理するのが難しいため、この問題を見て困ってしまう者も多いだろうが、ベルリン会議およびこの会議によって締結されるベルリン条約の意義（＝ロシアの黒海方面における南下失敗）をきちんと把握していればブルガリアへの対応を覚えていなくても選択肢4の「ロシアは…南下政策の基盤をかためた」という文章が誤りであることに気づくはずである。普段から歴史の流れや意義を意識して学習している者にとっては容易な問題であろう。

【Ⅲ】

予想配点	14/60 点	時間配分の目安	12/60 分
出題分野・テーマ	東西の貨幣を中心とした経済史		
出題形式	正誤、選択式		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問A：C 問B：C 問C：B 問D：C 問E：B 問F：C 問G：C 問H：B 問I：C 問J：A 問K：B 問L：C		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・3月期②3, 4回 ・4月期1, 2回 ・6月期3回 ・9月期1, 2回 ・12月期1, 2回		

●本大問の特徴・概要

洋の東西を問わず、古代から現在までの貨幣や税制を中心とした経済史。細かい知識を問う難問が多く、今年度の問題の難易度を大きく押し上げている。現役生でこの12問を全問正解するのはほぼ不可能と思われる。本学部は例年、こういった難問ぞろいの大問が存在するのでそれ以外の箇所ですでに多くの「貯金」をつくれるかがポイントとなってくる。

●注目すべき小問

問A、B、D、F、G、I、L (C：難問)

これらの問題の難易度を押し上げているのは次のような理由が挙げられる。①戦後の経済史では世界史というよりむしろ政治・経済で扱う用語の知識が要求されている点(例：問A「欧州通貨制度(EMS)」、「完全市場統合」)、②中国史では教科書・テキスト等にほとんど記載されていない細かい用語の知識が要求されている点(例：問D「金の中都」、問G「算賦」、問L「幣制改革」「四国借款団」)、③全体的に歴史の流れで論理的に正誤判定できる問題が少なく特定の用語に関する細かい知識を知らなければ正解に辿りつけない問題が目立つ点(例：問E「李斯が始皇帝の治世時には処刑されていないので選択肢3は誤り」)。これら7問に関しては正答できなくても合否には差し支えないと思われる。ただ、四択正誤判定問題なので消去法を駆使して、四択を三択あるいは二択にまで絞り込むことは可能である。当然のことながら、自信を持って正解を導き出せない難易度の高い正誤判定問題は、あり得ない選択肢を消去して正解の確率を上げるよう足掻く癖を普段からつけておくこと。特に選択問題の多い私立大学ではそういった合格への執念が実を結ぶことが往々にしてあるのだから。

【IV】

予想配点	20/60 点	時間配分の目安	24/60 分
出題分野・テーマ	南北戦争後のアメリカ合衆国		
出題形式	記述式、論述式 (100 字以内)		
小問別難易度	※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す		
空欄 1	C	空欄 2	B
空欄 3	C	空欄 4	A
空欄 5	B	空欄 6	B
空欄 7	B	空欄 8	B
空欄 9	A	空欄 10	C
空欄 11	C	空欄 12	C
空欄 13	C	下線部 14	B
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	・夏期講習「近代史」「現代史」 ・冬期講習「アメリカ史」		

●本大問の特徴・概要

近現代のアメリカ合衆国に関して、文章中の空欄に適切な語句を記入し、また 100 字以内の論述を 1 問課す本学部の特徴が最も出ている大問。昨年度よりは若干、解きやすくなった感はあるものの、空欄補充は教科書にあまり記載されていない用語や、歴史用語というより一般的な用語を要求する問題も多く見られ、ほとんど空欄のまま終了した受験生も少なくなかったであろう。正直、このレベルの空欄補充になると半分程度の正答率でも十分に合格は狙える（もちろん大問 I・II できちんと得点していることが前提である）。

一方、論述の方は空欄補充よりも与しやすくこちらで得点を稼ぐのが得策であろう。論述問題は国公立志望者だけのものではない。特に本学部に関しては、難易度の高い細かな用語を確認する時間のない現役生にとって論述力が浪人生と五角以上に戦うための非常に有効な武器となり得るのである。

●注目すべき小問

空欄 1、3、10、11、12、13 (C：難問)

上記の特徴・概要でも記載した通り、これらの問題は教科書にほとんど記載されていない用語（例：問 10「ジェロニモ」、問 11「金ぴか時代」は現在発行されている世界史 B 教科書 11 冊中 1 冊のみに記載）や歴史用語というよりは一般的な用語（例：問 3「地主」、問 12「労働運動」）を要求しており、これらの小問は解けなくても合否にはあまり差し支えないと思われる。それ以外の小問で確実に得点し、何とか 13 問中 7 問正解の形にまでもっていきたい。

下線部 14 (B：合否を分ける問題)

上記の通り、この論述問題で確実に部分点を確保したい。ホームステッド法の内容自体は早稲田を受験するレベルであればそれなりに文章化することはできるはずだが、意義をきちんと指摘できるかが高得点のカギとなる。この法律により当初、南北戦争に関係の薄かった西部の北部支持を獲得したことで戦争開始時点で劣勢だった北部の形勢逆転に繋がるといった南北戦争の勝敗に関わった点だけではなく、西部への移民希望者を増加させたことで西部開拓を促進する一因となったことにも言及できれば満点も十分に狙える。